

丸山遺跡

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1974

茅野市教育委員会

丸山遺跡

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1974

茅野市教育委員会

序

この丸山遺跡の発掘調査は、東京通信工材株式会社がこの地に福利厚生施設を建設することに伴い、緊急発掘調査をすることになり、同会社はその業務を茅野市文化財審議会委員長小平実人氏を委員長とする丸山遺跡緊急発掘調査委員会に委託された。

そこで、同委員会は昭和48年11月16日より12月11日の2カ月間に亘って発掘調査を実施し、引き続き測量と遺物の整理復原を行ない、さらに報告書をまとめ、ここに印刷刊行する運びとなった。

この遺跡は、茅野市米沢北大塙の西南にある独立した丸山と称する丘陵の西北部に位置している。また、この丸山は北に霧ヶ峯一帯の高原を背負い、東と南に蓼科山・八ヶ岳を望み、遠く駒ヶ岳をはじめ甲斐の山々を仰ぐ景勝の地である。南面の眼下に上川を控えてはおるもの、飲用水は丘の北麓の湧水一箇所に頼るのみであったが、上水道の発達した今日この丘に同会社が厚生施設を計画したのは無理からぬことである。

遺跡としては小規模のもので、住居址は4基、小窓穴10基ではあるが、この地方としては数少ない縄文早期や下島期の住居址が発見され、第1号住居址からは原始芸術として優れた貝殻状突起付深鉢の完形に近い土器が出土した。

いずれにしても、この寒冷期に短時日をもって発掘調査が順調に終了出来、事後処理がなされ、記録保存としての報告書が出版されたことは、調査関係者各位の絶大なご理解とご協力の賜と深く感謝申し上げる。特に、東京通信工材株式会社社長佐々木繁雄氏の格別なるご理解によるご援助と、種々ご斡旋の労を執られたタネカ工業株式会社社長花岡健雄氏に心から御礼申し上げる。

おわりに、遺物の整理復原は宮坂篤夫・柳平嘉彦の両氏を煩わし、報告書一切は当教育委員会の宮坂虎次氏が当たった。また、遺物はすべて当市の尖石考古館に保管展示されている。

昭和49年3月

茅野市教育長 木川千 年

目 次

序

挿図目次

第Ⅰ章 位置および環境.....	3
第Ⅱ章 調査の経過.....	4
第Ⅲ章 遺構.....	8
1. 住居址.....	8
2. 特殊遺構.....	13
第Ⅳ章 遺物.....	16
1. 土器.....	16
2. 石器.....	23
第Ⅴ章 総括.....	26

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡付近図（5万分の1）
- 第2図 丸山遺跡地形図（2500分の1）
- 第3図 遺構配置図（600分の1）
- 第4図 第1号住居址（80分の1）
- 第5図 第2・3号住居址（80分の1）
- 第6図 第4号住居址（80分の1）
- 第7図 ピット1号（20分の1）
- 第8図 ピット5号（20分の1）
- 第9図 ピット7号（20分の1）
- 第10図 ピット8号（20分の1）
- 第11図 ピット9号（20分の1）
- 第12図 ピット10号（20分の1）
- 第13図 第1類・第2類・第3類土器拓影（2分の1）
- 第14図 第3類・第4類土器実測図及び拓影（2分の1）
- 第15図 第5類土器拓影（2分の1）
- 第16図 第5類土器拓影（2分の1）
- 第17図 石器実測図（2分の1）
- 第18図 石器実測図（3分の1）
- 第19図 石器実測図（3分の1）

第Ⅰ章 位置および環境

遺跡は、茅野市米沢小学校の西に細長くのびる孤立丘「丸山」の西北部に位置する。丘陵の南には蓼科山・天狗岳を水源として諏訪湖にそそぐ最大の河川「上川」が流れ、氾濫、決済、堆積作用の様

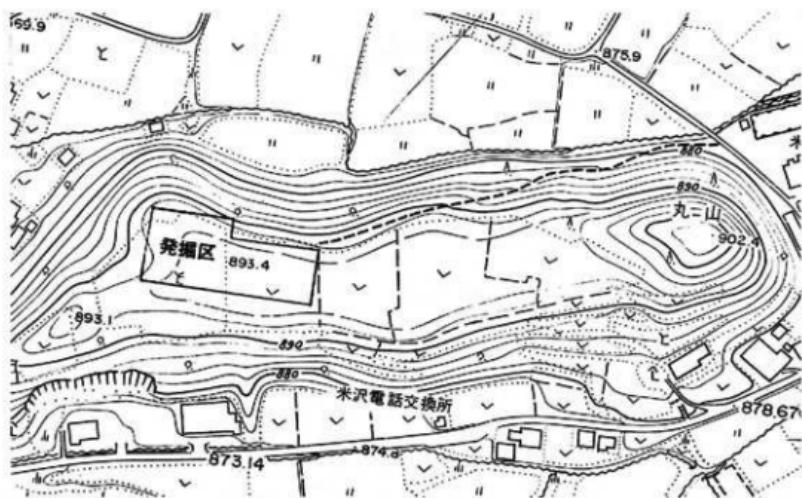


第1図 遺跡付近図(5万分の1)

返しによる沖積地が形成される。丘陵の長さは 360m、幅約 100m で、標高は頂部で 902m、発掘地点では 893m である。丘陵斜面は勾配が急で、東西両端は、おそらく上川の氾濫により浸食されて、孤立丘として残されたものであろう。また、かつては上川は丘陵の北側を流れたこともあると思われ、霧ヶ峰山塊の裾まで沖積地が発達する。上川面と丸山の比高は 24m である。霧ヶ峰の山裾は小溪流の形成した扇状地が発達し、上川沖積地と接して、ここに北大塩の集落が立地する。

北大塩は八ヶ岳西山麓の集落では古村で、肥沃な沖積地に早くから開け、戸数も多く、現在 240 戸を数える。また丸山西麓には戸数 40 戸の鉄物師屋新田が位置する。

丘陵の東端部は一段と小高く、林の中に神社が祀られ、また南斜面裾には祝神が、西斜面には糸玉神社と、周囲には石祠が散在している。丘陵面は畑であるが、古考の言によると、その開墾は江戸時代に遡るようである。米沢地区は駒形遺跡をはじめとして、大小の遺跡が分布するが、本遺跡を除い



第2図 遺跡地形図(2500分の1)

てはすべて霧ヶ峰南縁の扇状地や山麓端の台地上に位置する。

第Ⅱ章 調査の経過

丸山遺跡の調査は、東京通信工材株式会社の厚生施設建設とともに記録保存のための緊急発掘調査である。

昭和48年3月から4月にかけて丘陵全面の綿密な表面採集を行なった。地表面に散見される遺物は余り多くなく、黒曜石剝片および土器小片の比較的集中する焼 6158, 6159, 6160, 6161, 6162を遺跡の範囲と定め、なお若干のピット調査も実施した。同年11月に茅野市文化財審議委員長小平実人を委員長とする丸山遺跡緊急調査委員会を発足させ、受益者東京通信工材株式会社との間に委託契約を締結して183万円の委託費により事業を遂行した。当初予定した発掘面積は 2415m^2 であったが、最終的には約 3000m^2 を発掘調査した。発掘は2m間隔、2m幅のトレンチを東西に設定して行なった。

なお、調査委員会の役員構成、および発掘調査に参加協力された方は下記のとおりである。11月中

旬から12月中旬にかけての寒気の中の調査であり、その御労苦に対し心から感謝する次第である。

調査委員会役員構成

委員長	小平実人	茅野市文化財審議委員長
副委員長	今井すみ江	茅野市文化財審議副委員長
委員	五味さかん	茅野市議会社会文教委員長
"	花岡健雄	茅野市教育委員長
"	小川由加里	茅野市文化財審議委員
"	宮沢伝	"
"	茅野慶次	"
"	木川千年	茅野市教育長
調査員	林 賢	岡谷市文化財審議委員
	宮坂光昭	諏訪市文化財審議委員
	武居幸重	茅野市
	宮坂虎次	尖石考古館主事
事務局長	木川千年	教育長
" 次長	小島日吉	教育次長
" 係長	五味孝	社会教育係長
" 局員	岩波吉春	社会教育主事
	長田篤	主事
	戸田外史	"
	福田洋子	社会教育指導員

発掘参加者

林賢・武居幸重・柳平嘉彦・宮坂篤夫・小松良幸・樋口為夫・三輪正・村松正晴・田中知義・樋口喜美・伊藤茅子・菊原美千代・吉田さやか・吉田千枝子・吉田たつい・塩沢かおり・吉田あき・樋口さちえ・樋口圭子・小林ふじえ・牛山はつみ・牛山供吉・牛山つかね・小林しま・牛山ます・牛山てる・竹村製裘子・村松源一・樋口功・品川さち子・牛山富美・小出ちさと・神林かづ子・小出かなえ・守矢正文・米沢小学校児童

発掘日誌

11月16日(金)晴

事務局岩波・戸田・宮坂の3名にて発掘器材の購入と運搬を行なう。急斜面のため発掘地点まで運び上げるのに難渋する。

11月19日（月）曇 時々小雪舞い寒し

発掘区域の背丈以上にのびた雑草の刈取り作業。五味係長他社会教育係参加。

11月20日（火）晴強し 快晴

トレンチ設定と杭打ち。午前11時より発掘開始。秋の収穫入れが終らず、作業員が少ないので地元の北大塩を巡回して参加協力を依頼する。塩沢一保さんがこのことに尽力してくれる。

11月21日（水）曇 小雪舞い終日寒し

E-3より下島式の典型的な土器を発見し一同大いに喜ぶ。底脚部を欠損するが、住居址床面に伏せている。周辺より石鏃2、打石斧1、土器破片6片を検出する。

11月22日（木）朝小雪舞い終日寒し

下島式土器の出土した住居址を整理し、これを丸山第1号住居址とする。この住居址床面から石斧1、石槍1と、土器破片がやまとまって出土する。竪穴の南および南東隅に大きなピットがある。C-6に底部中央と周壁に小孔のあるピットを発見し、覆土より下島式土器破片、磨石斧破片、凹石を検出する。

11月23日（金）降霜 日中は快晴にて穏やか

第1号住居址の床面を調査する。床面は黒土の充填する小孔が多い。床面の横円形の石を起してみると石皿である。I-3のピットより下島式土器破片3点を検出する。米沢小学校の児童が手伝ってにぎやかである。

11月24日（土）霜柱はげし。日中は穏やかな小春日和

I・K・Mトレンチの調査。K-3に長横円形のピットを発見する。M-9にも浅いピットがあり、ピット5号・6号とする。出土品はない。

11月25日（日）

発掘作業は休みとし、尖石考古館にて宮坂謙夫氏と下島式土器の復原をする。

11月26日（月）晴

M・Fトレンチの調査。遺物、遺構ともなし。

11月27日（火）晴 小春日和

遺物の時期も終り、婦人の参加者が増加する。ピット7号・8号を完掘する。

11月28日（水）晴 終日穏やか

今日から玉川栗沢地区の方々が参加。事務局と柳平さんの車で迎えに行く。和田遺跡発掘の経験者なので多いに期待する。桑烟の桑棒切り作業を行なう。

11月29日(木) 霜激し。日中は快晴にて穏やか

参加者は次第に増え、本日は26名となる。A''-(−4), A''-(−5)から早期末と思われる土器破片を検出する。礫石も遺存するところから、住居址の存在を予想する。

11月30日(金) 晴

本日の参加者29名となる。昨日発見した住居址は重複し、石畳炉をもつ長方形の住居址を第3号址とし、その下層に重複する住居址を第2号住居址とする。第2・3号住居址の南側の桑烟を調査する。桑株の抜根が大変な作業である。黒土層が他の畑とくらべて厚く、散発的に縄文中期土器破片が出土するだけである（この畑は清十郎畑と呼ばれる、江戸時代後期に北大塩の郷士「吉田清十郎」なるものが葬下の北大塩部落の農民に、他所から黒土を背負わせて運搬させ、自分の畑を肥やしたという伝承がある。米沢地区は遺跡の多いところがあるので、その土に混って土器破片が運ばれた可能性もある）。

12月2日(日) 晴

第2号址を拡張し、石錠2点と搔器様石器を検出する。

12月3日(月) 小雪舞う

第2・3号住居址の調査。石核1、石匙1と黒曜石製の異形石錠を検出する。

12月4日(火) 終日小雪舞い荒れる。

第3号住居址を統括する。床面より縦形石匙1点検出する。清十郎畑と呼ばれる6158番より一段低い6155の荒畑の茎刈りをして、ここにトレンチを設定する。

12月5日(水) 強霜 日中は快晴で穏やか

清十郎畑に西接する畑を第3区とし、これを調査する。打石斧1点と黒曜石小型石匙1点の他はみるべき遺物なし。

12月6日(木) 晴 時々轟り終日寒し

第2号・3号住居址の清掃。丘陵西北端の斜面に接して第4号住居址を発見し、これに精力を注ぐ。縄文中期の土器破片が出土する。

12月7日(金) 朝薄雪あり。終日小雪舞う

第2・3号住居址の測量。全員で第4号住居址を発掘し、夕刻完掘する。出土品は少なく、磨石斧1、石錠1、土器破片少々。

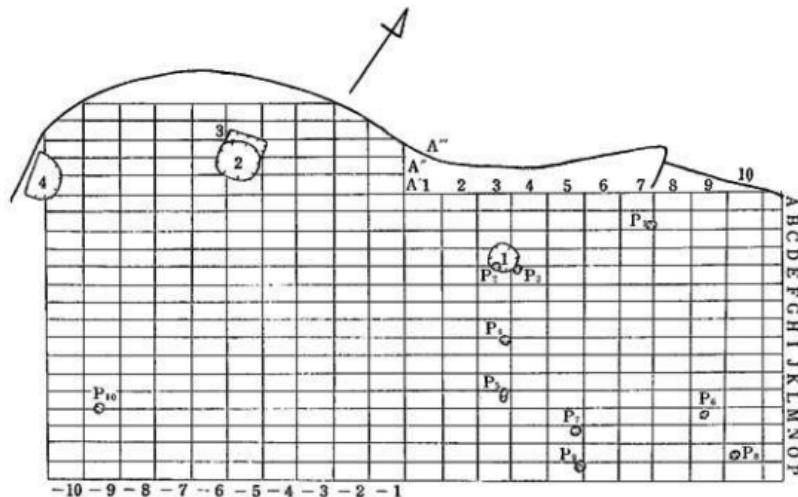
12月8日(土) 寒気強く、日中は快晴

第3区の西側の畑にトレンチを設定し調査したが、遺物遺構ともに全くなし。発掘作業をほとんど終了する。

12月11日(火)快晴

教育委員一行が視察に来る。岩波主事の応援を得て、柳平さんの車で器材の搬収運搬。午後2時半より茅野市役所米沢支所にて発掘参加者の勞をねぎらう。

第Ⅲ章 遺 構



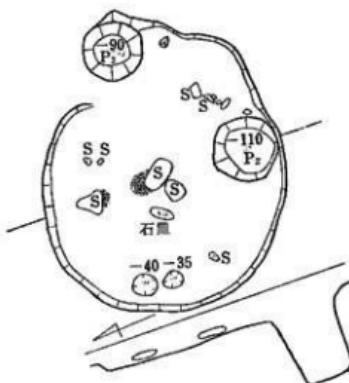
第3図 遺構配図(600分の1)

1. 住居址

第1号住居址

予備調査の際に磐石を発見して遺構の存在が確認されていた。これを中心として周囲に拡張して東南部床面に底脚部を欠損して伏せられた下島式土器を発見する。床面のロームは明るい黄褐色を呈し、掘り込みが浅いため周壁は余り明確ではない。床面に点綴する黒土を除去したところ、連続する

多数の小孔となり凹凸が著しい。床面中央に 3 個の石が遺存し、また焼土が堆積する。東南の號が明確でなく、5 個の小石を配列した線が当初の住居址の範囲と考えられる。径 3.5 m のほぼ円形を呈す



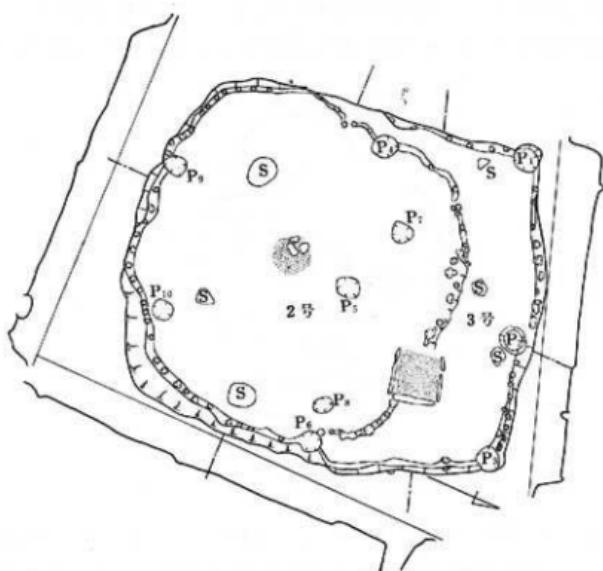
第4図 第1号住居址 (80分の1)

る住居址である。南壁に接して径 1 m、深さ 110 cm の円形のピットがあり、掘り込みは直壁に近く、底部は平らである。住居址の東にも径 85 cm、深さ 90 cm の円形のピットがあり、底部は平らである。ピット 2 号からピット 3 号に周壁が連続するところから、東の梢円状に張り出した部分は二次的な拡張床面であろう。ピットは形態、規模から同じ目的で掘られたものと推定され、覆土から下島式土器破片が出土しているところから住居址に付随する施設と考えられる。柱址とみられるものは明確ではないが、西部分に径 25 cm、深さ 35 cm と、径 35 cm、深さ 40 cm の 2 個のピットが並ぶ。

出土遺物は前述の下島式深鉢 1 点と破片、石皿 1、打石斧 4、石錠 4、削器様石器 1、圓石、磨石である。

第2号住居址

住居址の北部分の床面が第2号住居址床面より約 10 cm 下にあり、平面形は径 4.5 m の隅丸方形を呈し、四隅の対角線は約 5 m である。周壁の高さは 40 cm で斜傾し、床面はほぼ平らで堅い。幅 10 cm、深さ 6~8 cm の周溝をめぐらし、周溝には 10~20 cm の間隔で径 6~10 cm の小孔が穿たれている。柱址穴は、P7・P8・P6・P10 の 4 主柱址で、北側の P7・P8 は壁より離れた内柱で、南側の P6・P10 はほぼ壁に接して掘られている。P7 は短径 40 cm、長径 45 cm の梢円形で、深さは 40 cm



第5図 第2・3号住居址 (80分の1)

P8は径32cm、深さ30cmの円形で底に小孔がある。P6は径29cm、深さ42cmの円形、P10は径34cm、深さ28cmの円形で底部に不規則の小孔がある。炉址はほぼ中央に位置し、床を僅かに凹めて3個の小石を配した地床炉で、周辺は焼けて赤い。住居址床面からの出土遺物は少ないが、無文土器口縁部破片が第2号址の張り床下から、細線文土器口縁部破片が東北隅周溝内より検出されたことは、この住居址の時期を裏付ける貴重な資料である。第13図1~8に示すものがそれである。石器は覆土より石鋸2点、石匙2点、搔器1点、異形石器1点、刀器状剝片等（第17図5・6・8・9・11・12・14~16）が出土した。

なお、この住居址の上層には焼土があり、下島式土器破片や中期前業の土器破片が混在して出土している。したがって、これらの石器類もこの住居址に伴うものであるかどうかは確実でない。

第3号住居址

台地の北縁近くに位置し、縦2.9m、横4.8mの長方形堅穴住居址である。柱址穴は四隅と横中

間に各 1 の 6 主柱址で、ほぼ等間隔に掘られている。

P1 は径 34 cm 深さ 57 cm, P2 は径 39 cm 深さ 77 cm, P3 は径 39 cm 深さ 70 cm, P4 は径 32 cm 深さ 54 cm, P5 は径 37 cm 深さ 47 cm, P6 は径 30 cm 深さ 53 cm である。床面はやや南に傾斜し、南部分第 2 号住居址の床面上にかかる。床面および炉址の状況から、第 2 号址の廃絶後相当長年月を経て、いったん 3 号址がすっかり埋没した後に構築されたものであろう。したがって、この住居址構築の際、第 3 号址の遺物および上層の焼土に関連する遺物が拡乱されてしまったものと推定される。

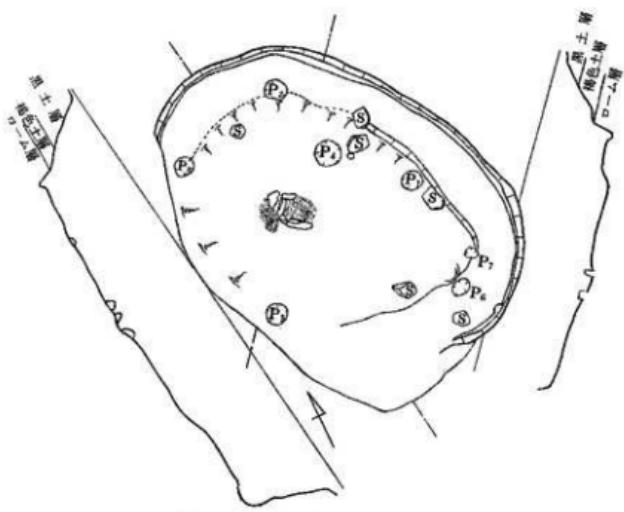
炉は中央から東寄りの南北中間に位置する。北・東・南の三方を、割石を縦に植えて囲んだ石囲炉である。西を焚口として、焚口は石を使用しない。焚口左右両側の石は、厚さ 5~6 cm の同一石材の安山岩を、大小各 2 個に同じ長さに割ったものである。炉奥の石材は花崗岩を使用し、最も厚いところで 10 cm ある。内側は割って平らとし、外側は原石面である。炉鉢は床面より 5~7 cm 高い。炉内は床面とはほぼ平らに焼土が堆積するが、焼土の厚さは 5~6 cm で、炉底の掘り込みは極めて浅い。東・北・西に斜傾する壁があり、ローム層を約 15~20 cm 掘りこみ、燃には斜傾する小孔が穿たれている。東西壁根には周溝がある。

第 4 号住居址

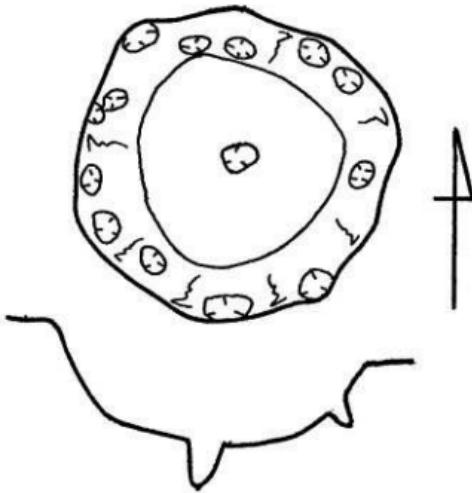
台地の西北縁ぎりぎりの位置に構築されている。住居址は急斜面に接し、地形に制約されたためか著しく楕円形を呈するが、西北部分は地形および境界杭に制限されて調査不可能であった。平面形は南北の径 5.4 m の、南北に長い楕円形住居址である。開墾の際、台地の斜面を均したためか黒土層が厚く、東側で地表面から 118 cm 下に床面がある。黒土層 44 cm, 褐色土層 32 cm でローム層となる。壁は全周し傾斜する。周溝は幅が 8 cm、深さ 6 cm で全周する。床面は堅いが水平でなく、中央の炉址にむかって傾斜する。とくに床面の東部分は壁から 70~80 cm 番れた線で、約 10 cm 一段低く落ちこんでいる。柱址穴は 7 カ所を数え、P1 は径 35 cm、深さ 60 cm で袋状を呈す。P2 は 32 cm × 28 cm の楕円形で深さは 41 cm、底部に小石が 2 個遺存する。P3 は径 26 cm 深さ 45 cm の円形、P4 は径 36 cm 深さ 67 cm の袋状円形、P5 は径 30 cm 深さ 63 cm の円形、P6 は 20 cm × 30 cm の楕円形で深さは 66 cm、P3 は 18 cm × 15 cm、深さ 47 cm と最も小さい。

炉址は小型の石囲炉で、長楕円形の小さな河原石で囲み、南側と東側半分の炉石を欠除する。炉底は比較的浅く、赤く焼け、炉の西側床面も焼けている。

出土遺物は少なく中期前葉から中葉に比定される土器破片と、石錠 1、小型定角式磨石斧の断折したもの 1 点である。



第6図 第4号住居址 (80分の1)



第7図 ピット1号 (20分の1)

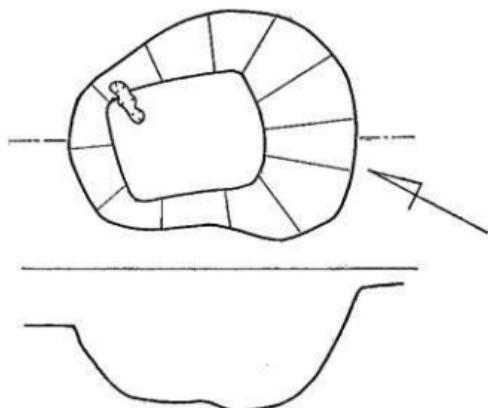
2. 特 殊 遺 構

ピット1号 B-7に発見された遺構で径1.1m、深さ35mのほぼ円形を呈す。底部は軟弱で中央に小穴があり、また斜傾する壁に小穴が穿たれている。ピット内の覆土から土器小破片数点が検出された。欄文を施したもの1片と、平行条線の施文された下島式土器片で、うち1点は底脚部の張り出した部分の破片である。

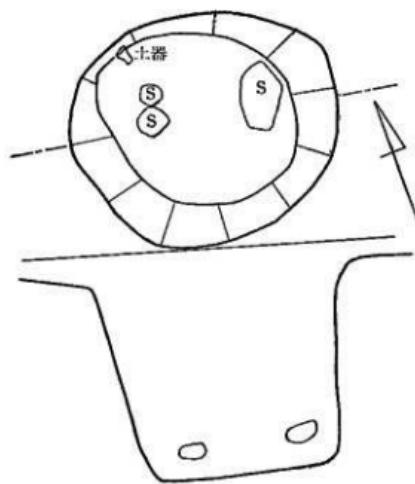
ピット2・3号 第1号住居址に付随する深いピットで、円形を呈し底部は平らである。2号は径1m深さ110m、3号は径85cm深さ90cmである。

ピット4号 I-3に発見された径約1m深さ約20cmの不整形の浅いピットで、中心に小石が3個遺存し、ピット内に不規則に小穴が穿たれている。下島式土器破片3点が検出された。

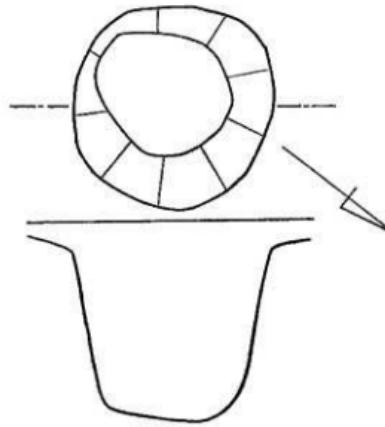
ピット5号 K-3・L-3にかかるピットで長径104cm、短径80cmの不整形円形を呈し、底部は船底形である。遺物は検出されない。



第8図 ピット5号(20分の1)



第9図 ピット7号 (20分の1)

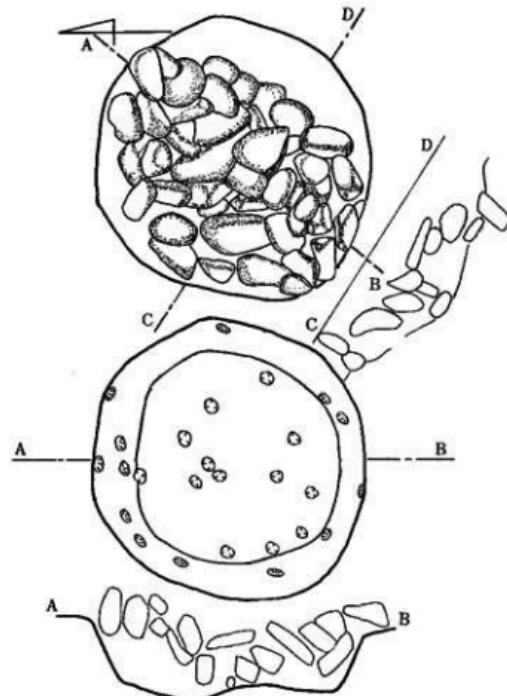


第10図 ピット8号 (20分の1)

ピット 6号 ローム面から深さ 12cm に掘りこんだ浅いピットで、長径 160cm、短径 140cm の梢円形を呈す。覆土中に石が 1 個遺存し、底部に不規則に小穴が穿たれている。

ピット 7号 径 80~95cm の円形に近いピットで、深さ 80cm、壁は僅かに傾斜する。底は平らで、底部近くの覆土中に 3 個の石が遺存し、また深さ 50cm の北壁に接して無文土器底脚部 1 点が出土した。(第 14 図 40)

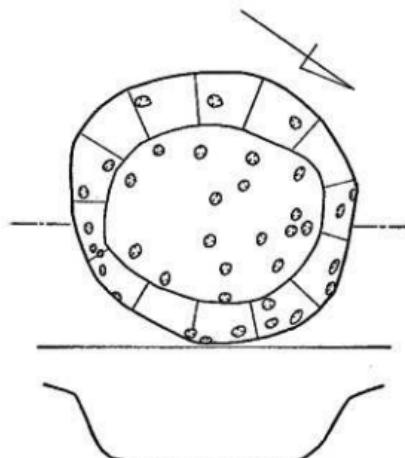
ピット 8号 O-10 に発見されたピットで、径約 70cm 深さ 65cm の円形を呈し、底部は平らである。出土遺物はない。



第 11 図 ピット 9号 (20分の 1)

ピット9号 磨石を集積したピットで、表土下10cmに礫の頂部が発見された。礫は扁平、球形を呈する河原石で、大きさは幼児頭大から小児頭大のもので、長径108cm、短径78cmの橢円状にローム面より21cm高く集積する。集積は周辺が高く中央がややくぼみ、南部分が若干欠けているようである。石の数は68個を数え、その間隙には炭が遺存していた。積石を除去したところ焼土があり、壁も焼けていた。ピットは径約1cm深さ28cmの円形で、底部および壁に小穴が穿たれていた。遺物は検出されなかった。

ピット10号 径約1m、深さ30cmの円形に近いピットで、底部および壁に径4~6cmの小穴が穿たれている。



第12図ピット10号(20分の1)

第IV章 遺 物

1. 土 器

出土した土器は、縄文時代早期末から前期初頭に編年される一群、前期末葉の下島式土器、中期前半から中葉にかけての一群と、時期的に三期に大別される。完形に近い下島式深鉢を除いては破片で

ある。

第1類土器(第13図)

第2号住居址より出土したもので、拓影1~7の他、無文土器の胸部破片がある。1は住居址東北部周溝内から検出されたもので、第2号址の時期を決定する重要な資料である。口縁部破片で、色調は赤褐色を呈し、胎土には余り砂粒は含まれず、焼成は良好である。厚さは10mmで口唇部は薄くとがる。口唇に細かな刻目をつけ、胸部には鋭く細い沈線文が斜格子状に施文される。内面は黒く媒が付着し、細かな繊維束にて整形したと思われる擦痕が横走する。2は1よりやや粗雑な胎土および焼成で、内面は赤褐色、外表面は黒色に炭化物が付着する。厚さは9mmで口唇部は薄く、粗い刻目がつけられ、口縁部はやや外反する。同一器体と思われる胸部破片が出土しているが、胸部は厚さ10mmである。3~6は同一形態の口縁部破片で、厚さおよび口縁部の外反度が若干異なる。いずれも色調は赤褐色を呈し、胎土焼成とともに良好である。口唇部は薄くなり、縦位の擦痕が認められる。器外表面に指頭による凹凸が残り、内面に横走する擦痕のみられるものがある。厚さは7~9mmで、輪積みの位置で欠けている。7は黒褐色を呈し焼成は良い。厚さ6mmの直口の口縁部破片である。

第2類土器

繩文の施文された土器片を本類とした。器形の窺知できるものではなく、また繊維は含有していない。8は第2号住居址の覆土から検出された底脚部破片である。外表面は赤褐色で、内面は炭化物が付着して黒色を呈する。厚さは6mmで焼成は良好である。横走する無節繩文が施文される。9~11は第1号住居址覆土およびピット1号から、下島式土器片とともに混在して検出されたものである。9は黒褐色を呈し、胎土に細かな砂粒を含み、焼成は良好である。10は焼成は余りよくなく、外表面は媒が付着して黒褐色を呈する。粗い繩文と、細竹管によると思われる横走する平行沈線がつけられている。11は黄褐色を呈し斜繩文が施文されている。12はI-4より出土した。灰褐色を呈し焼成は堅敏である。口唇部を箇状工具で整形している。厚さ8mmで単節斜繩文を施文する。13はピット1号の覆土から、14はL-6、15はL-8より検出された破片である。

第3類土器

竹管による条線文を地文とした土器を本類とする。大部分は第1号住居址から検出されたものであるが、36・37は第2号住居址上層より出土し、30はピット1号から検出された。なお、若干の破片

が各所から検出された。

27は第1号住居址の床面に逆さに伏させて出土した完形に近い土器である。底脚部を欠損する。胎土は良好で、極小の石英粒および長石をほぼ均一に含有する。色調は全体に黄褐色を呈するが、口縁部および胴上半部の一部には火熱によると思われる黒色の変色帯がみられる。文様は沈線を集合させた条線を地文とし、口縁部とその付近においては、上部には中央に円盤状の突起をもち、その両側に中央がやや凹む貝殻状の突起を配した装飾が5個加飾され、それ以下はいぼ状突起とボタン状突起が全体として均一に底脚部まで施されている。復原器高は21.5cm、口径21cmである。16・29は結節状浮線文の施文されたもの、17は口唇に近いところに粗い刻目をつけ、ボタン状突起の剥落した痕跡がある。19・28・36はボタン状突起の貼付されたものである。21は小破片であるが、沈線を地文としてこまかに結節状浮線文が幾条も貼付されている。26・37は張線文が施文されている。

第4類土器

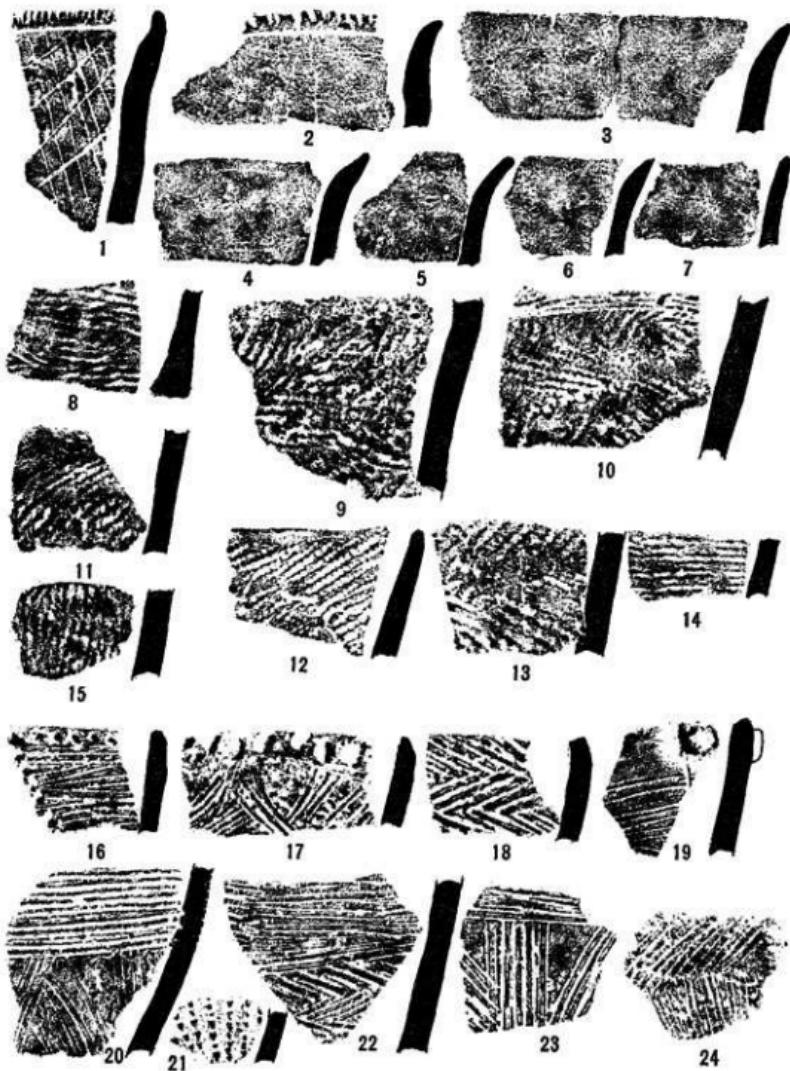
40はピット7号から出土した無文土器の底脚部である。底径が6cmで、底脚は横に張り、一見後期土器の底脚部に似ている。胴部上半の文様の有無が不明であるので、一応他の土器と区別した。厚さは9mmで、胎土に微細な雲母を含み、焼成は良好である。土器表面は凹凸が多く、手こね風の作りである。これら色調焼成から前期後半に属するものと思われる。

第5類土器

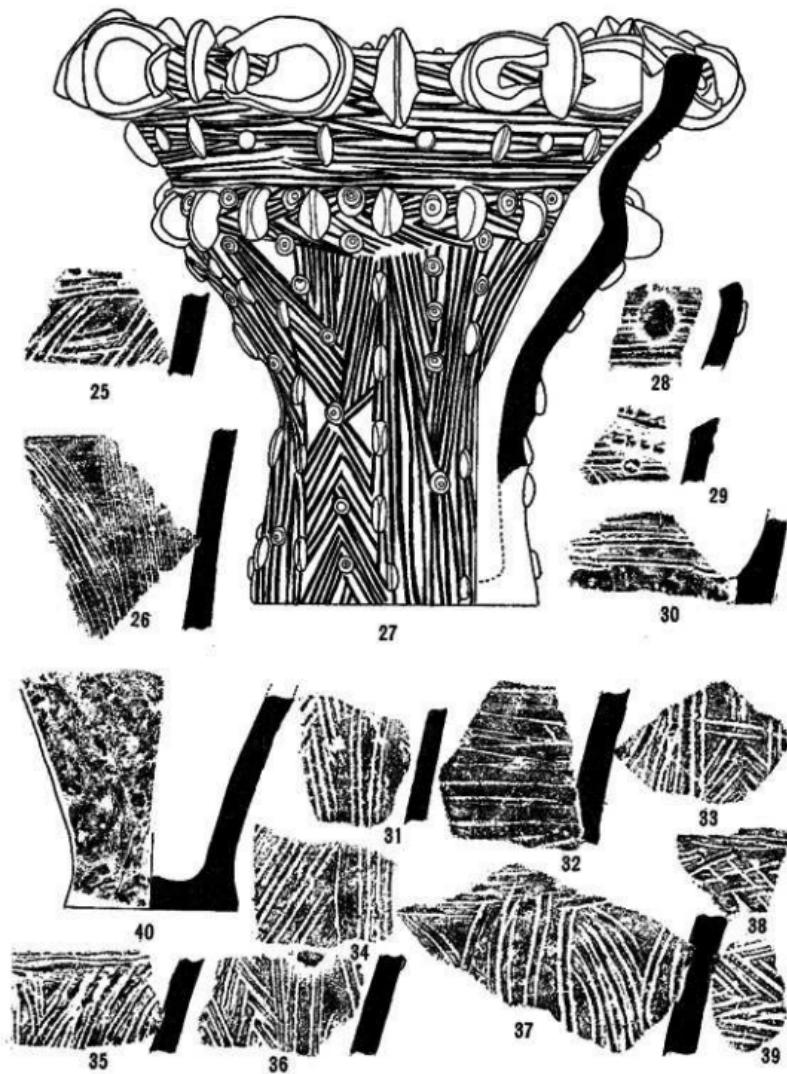
繩文中期前葉から中葉前半に位置する土器を一括して本類とする。第15図40~52は第2号住居址の上層より出土したもので、地表下40cmの褐色土層面に焼土があり、これに関連するものと思われるが、住居址は確認できなかった。40は明るい褐色を呈する口縁部破片で、太い平行沈線が横走し、頭部が僅かに内屈する。42・45がこれと同形態の口縁部破片で、45は綫の隆帯に粗い刻目を施す。44・51・52も平行沈線文土器であるが、44・52は粗い半割竹管による平行沈線が継に施される。46・47・48は隆帯に沿って連続爪形文の施文されたもの、41・43・49・50は繩文の施文されたものである。41は口縁部破片で円形の擦り消しがあり、50は太い沈線で繩文帯を区画する。

53~63は第4号住居址の出土資料である。53は底脚部破片、55は雲母をかなり含有し、焼成はややもろい。太い隆線と、それに沿う太い沈線で繩文帯を区画している。56・59・60は連続爪形文の施文された土器である。

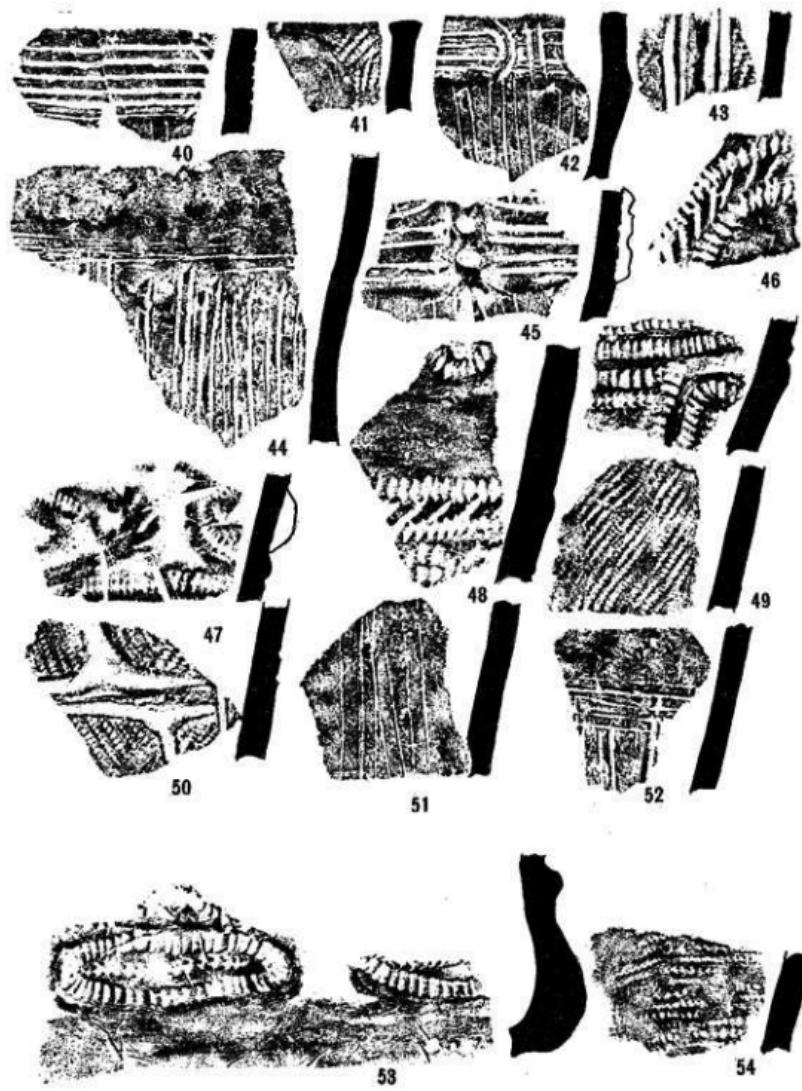
53・58・61はより中期最盛期的な文様で、55は中期初頭的な文様構成をもっている。



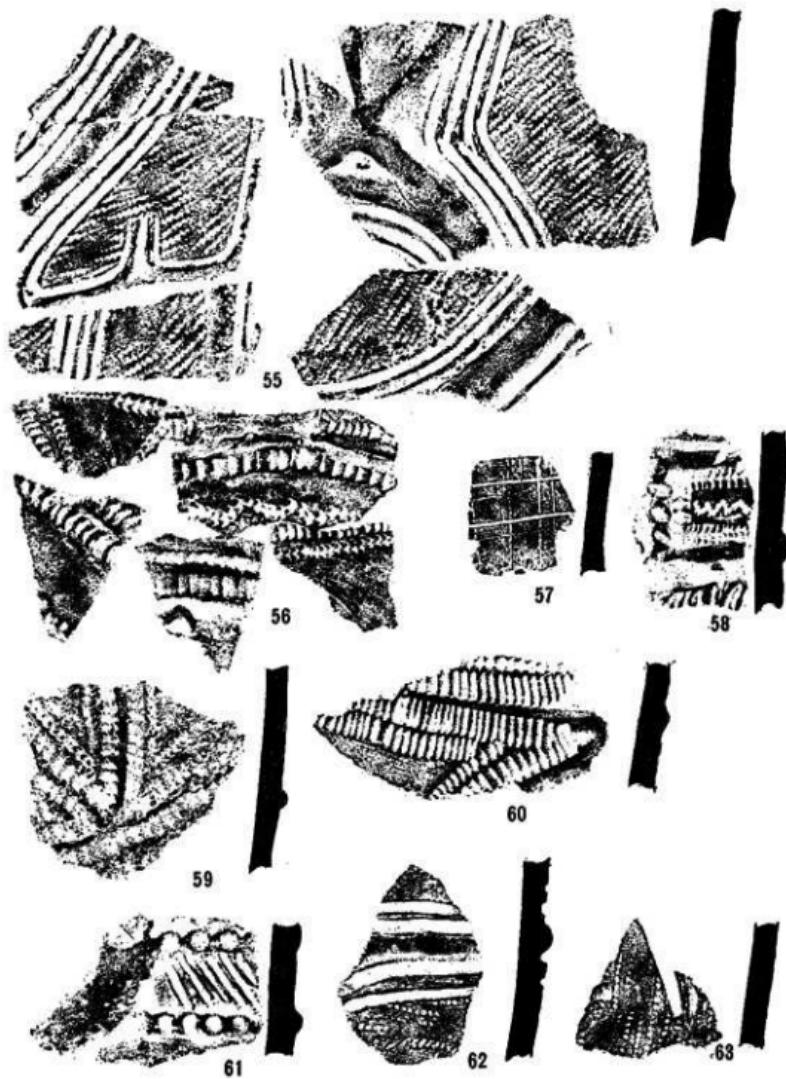
第13図 第1類・第2類・第3類土器拓影



第14図 第3類・第4類土壠実測図及び拓影(2分の1)



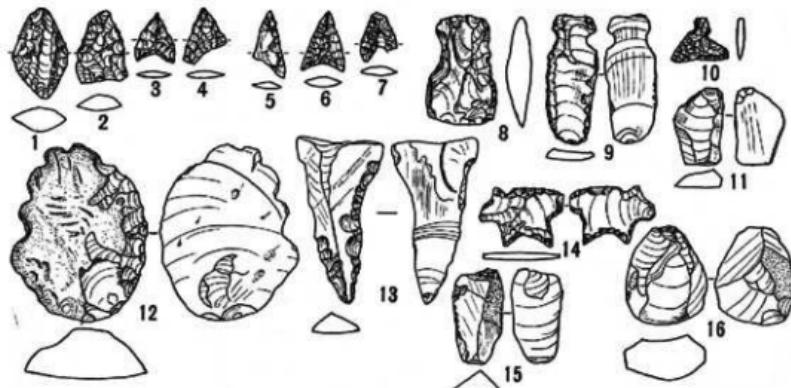
第15図 第5類土器拓影(2分の1)



第16図 第5類土器拓影(2分の1)

2. 石 器

石 鐵 石鐵は7点検出された。1~4は第1号住居址出土、5~6は第2号住居址、7は第4号住居址出土のものである。1は平面形菱形を呈するポイント様の石器である。ずんぐりと厚めで、剝離調整は両面共に極めて丹念である。2は底脚に抉入のない三角状を呈し剝離もやや粗雑である。3・4は薄手で先端部鋭く、3は裏面に平らな剝離面を残す。5は薄手細身で鋭く、両面に第1次剝離面を残す。6は透明の黒曜石で剝離は丹念、7は黒色に近い硅岩製である。

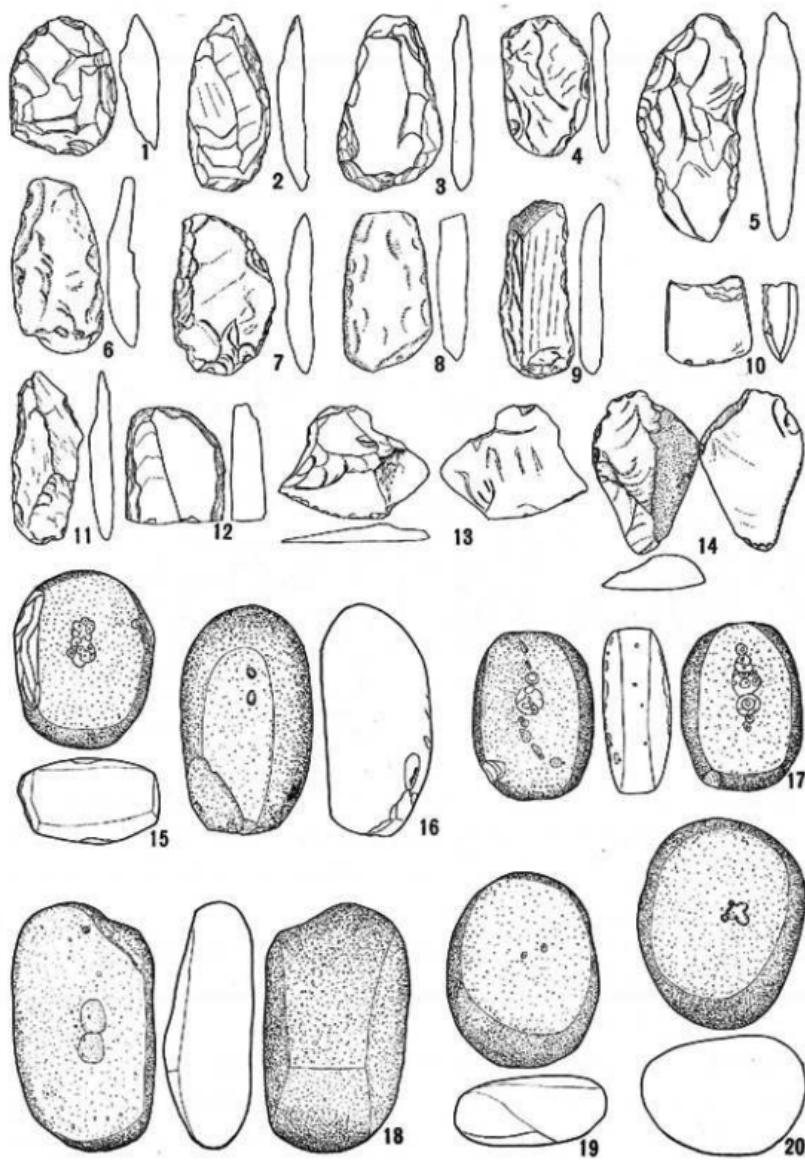


第17図 石器実測図(2分の1)

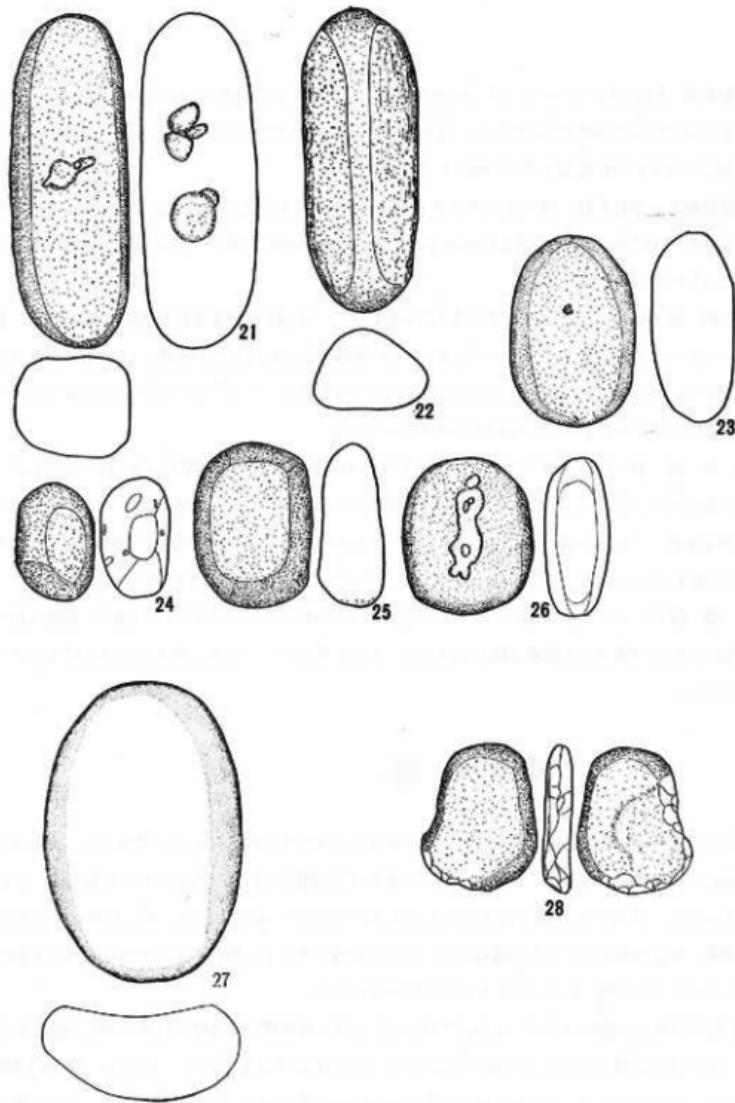
石 匙 8は第2号住居址から出土した。黒曜石製で中央よりやや上に余り深くない抉入部を作出した石箆状の石器。9も第2号址出土の縦形石匙で、刃器状剝片の両側を調整する。上端の両側に抉入部をつけてつまみとする。10は第2号址の覆土から検出されたもので、極小の横型石匙。黒曜石製で両面共に石鐵のようなこまかなく剝離が加えられている。

搔 器 12は第2号住居址の覆土から検出されたもので、無土器時代の搔器を思わせる調整である。表面が自然面の亀甲状剝片の左側縁に、自然面を剥取するような剝離調整を加える。裏面の主剝離面には打瘤、打瘤裂痕を鮮明に残す。

石錐様石器 13は第2号住居址から余り離れていないA'(-4)より出土した。尖った打面をもつ断面三角形の、先端が幅広となる三角状の剝片で、先端部および左側縁に剝離調整を加える。石錐様の石器であるが、錐の秀部が太く調整が粗い。左側縁の調整された抉入部は削器的な機能をもつものであろうか。



第18図 石器実測図(3分の1)



第19図 石器実測図(3分の1, 27-6分の1)

異形石器 14は第2号住居址覆土より検出された。非常に薄い透明な黒曜石剝片の全縁に、両面共に丹念な刃溝様の調整を加えている。猪を想像させる一種の獣形石器かと思われる。剝片の打面は右先端部の鼻と思われる部分に自然面として残されている。

刃器状剝片および石核 11・15・16は第2号址出土で、11は黒曜石縦長剝片の右肩縁に僅かな剝離を加える。15は側縁に使用痕と思われる刃こぼれのある刃器状剝片、16は小型扁平の小石核で片面だけに剝離痕を残している。

石斧 図示した14点が出土した。1~3は第1号址、5・14は第2号址上層焼土周辺より、他は各トレンチから単独に出土したものである。6・7・8は砂岩、他は頁岩である。13は石匙様の頁岩剝片であるが、弧状の側縁に僅かに使用痕らしき刃こぼれを残している。10の磨石斧は第4号住居址出土で、緻密な質の頁岩製定角式石斧の先端部破片である。

四 石・磨 石 15は第1号址内のピット内から出土した。両面に打撃による盲孔が認められる。16は三面に磨痕があり、17は全面を隅丸長方形に磨って、両面に盲孔がある。21・22は砾摺石で、21は側面を磨り、両面に浅い盲孔がある。22は横断面三角状を呈し、三面共に磨痕が顕著である。23・26は第1号址より出土した。26は全面を磨り形を整え、片面だけに大きな凹みがある。

石皿 37cm、24.5cmの梢円形を呈し、厚さは10.5cmである。皿の凹みは浅く、裏面は自然面であるが、皿部の縁および側面は粗く敲打して、あばた状となっている。第1号住居址の床面に伏せて遺存した。

第V章 総括

当遺跡は八ヶ岳西山麓の諸遺跡の中で、やや異なる立地条件を備えている。すなわち、丸山は上川の氾濫原に残された孤立丘で、周囲の斜面はかなりの急勾配を示し、氾濫原との比高も24mと高い。他の遺跡では、湧水のある渓や低地との比高は10~15mが一般的である。また周囲が、上川の氾濫、決済、堆積の繰返しによる平地のため、湧水にもめぐまれず、僅かに丸山の西寄北裾の1箇所のみである。居住の場所としてはむしろ不便な地形といえる。

米沢地区は繩文の遺跡が多く、丸山以外はほとんど霧ヶ峰南麓の扇状地や枝峯末端台地に分布する。とくに北大塙は大清水の北の扇状地上にある駒形遺跡を最大として、大小10余箇所の遺跡が山裾に沿って弓状に並び、遺跡の立地には事欠かない好条件を備えている。あえてこの丸山に住居址を構築したことは、特殊の事情によるものであろうか。

一般的には縄文時代の集落は、台地の頂部から南斜面にかけて形成される。とくに八ヶ岳山麓の台地は東西に走る関係から、光熱に対する風化の相違により、北側が急で南側が緩かとなる。また、湧水利用上の至便さにもよるであろう。

丸山は時代の異なる四基の住居址が、すべて丘陵西部の北縁に集中した。このことは湧水に最も近距離であるということにウエートが置かれたためである。

縄文早期末の第2号住居址の発見は、八ヶ岳西山麓においては該期のものとしては2番目である。遺物は少なかったが、時代の裏付けとなる土器が床面から検出されたことは幸であった。

さて、丸山遺跡の北東1400mに駒形遺跡が位置する。古くから遺物の豊庫として著名で、縄文早期から晩期にいたる大遺跡である。昭和35年尖石考古館により、初めて発掘調査が実施され、丸山第2号址と時期を同じくする住居址が発見されている。この住居址はローム層を15cm掘り下げて床面としたもので、平面形は東西3.7m、南北4.3mの隅丸長方形を呈し、炉址は地床炉である。周溝は入口部と思われる一部を欠いて全周し、周溝底にはほぼ等間隔に斜傾する小孔が穿たれていた。柱址は四主柱址で、南側の2個所は壁より離れた内床柱、北側の2個所は側壁に沿っていた。そして住居の入口部は周溝を欠く南西部である。さて、丸山第2号址は、駒形住居址との比較から、北向きの住居であったことが判る。すなわち、湧水の方向に面して入口が設けられたものであろう。日照には背を向いているが、風当りの強い孤立丘ではかえって適した住居の構造といえる。

駒形の住居址の出土遺物は豊富で、口唇に刻目のある薄手指痕文の丸底に近い尖底深鉢2点と、細線文指痕薄手土器破片、若干の含織維貝殻条痕文土器、花模下層式土器破片とともに、丸山第2号址より検出された赤褐色の無織維厚手土器が出土している。

また昭和49年、茅野市玉川荒神の下ノ原遺跡からもほぼ同時期の2基の住居址が発見された。住居址は径3.5mの円形に近く、地床炉・周溝および周溝底に小孔を有していた。ただ土器は僅かに花模下層式の尖底深鉢の破片だけであった。他の1基は褐色土層面に床面が構築されていたため、周溝の状態がはっきりしないが、地床炉を有していた。土器は木島式土器破片、関西系の薄手竹管文土器、含織維無文土器、花模下層式上器等の破片が共伴している。この3例を見るに、駒形遺跡を除いてはほぼ全面発掘であり、下ノ原の2基の住居址は約50m離れている。このことから縄文早期末から前期初頭にかけては、八ヶ岳山麓におけるこの期の住居址の形態規模は確立したが、到底集落を営むには至らず、孤立した生活であったものと考えられる。土器形式からみると、関東・関西・東海の三系統の土器が併出するもの、一系統のみのもの等があり、移動の際に使用可能のものは持ち去った

としても、文化交流の上からまことに興味ある点で、今後資料の増加を待って、更に検討したいと思う。

下島期の住居址の発見もまた八ヶ岳西山麓としては初例で、特に床上から完形に近い土器が発見されたことは望外の成果であった。住居址の平面形は当初は円形プランであり、床面のレベルの同一の点から、東南部を拡張して梢円形プランを呈するようになったものであろう。床面の多数の不規則な小ピットは、すべてが目的をもった施設とはいい難い。

中期の住居址第4号は、構造および出土遺物から中期中葉の前半に比定される。この時期には血族集團によるある程度の集落の構成が予想される。近距離の霧ヶ峰南麓に、遺跡地としての好適地が幾箇所もありながら、あえてこの地に1基のみ住居が営まれたことに興味がもたれる。

第3号住居址は伴出遺物が全くなく、時期不明というより他ないが、その形態、炉の位置構造等から、おそらく鎌倉期以降と推定される。北大塩は古村で、上川の肥沃な氾濫原を利用して早くから村が開けたから、あるいはそれに関連する住居址であろうか。この住居址もまた数千年前に同様に、湧水の最短距離に構築された。

小堅穴が10基発見されたが、形態的には底に小孔を有する浅い堅穴1・4・6・9・10号、船底形の浅い堅穴5号、深く掘り込まれた2・3・7・8号の三形態に分けられる。ピット9号は集石炉であろうか。底部の小孔が石積みのための棒をした孔とすれば、小孔を有する浅い堅穴は集石炉として利用した後、石を撤去したものとも考えられる。

第2号址から検出された異形石器は、その形態から実用的な機能を有するものとは思われない。歯形と考えれば、呪術的なものであろうか。

以上、遺構、遺物について若干の考察を試みた。おわりに丸山遺跡は、遺跡としては誠に小規模のものであったが、小規模遺跡のもつ性格の一端を解明把握することができ、まことに有意義な発掘調査であったということができるよう。



丸山全景



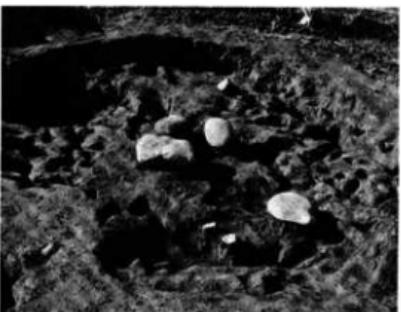
丸山突端



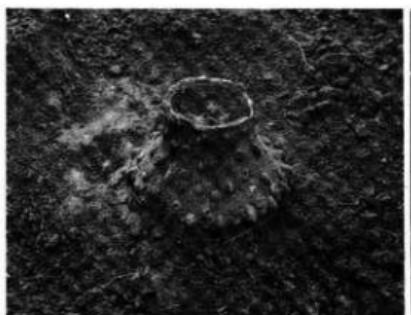
遺跡より八ヶ岳連峰を望む



発掘トレンチ



第1号住居址



下鳥式土器出土狀態



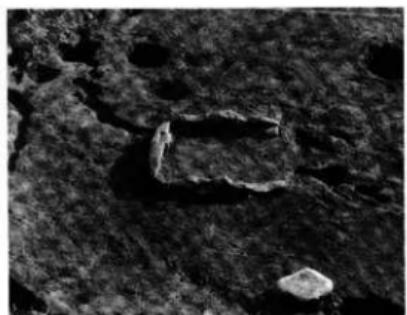
第2号、第3号住居址



第2号住居址



第2号住居址配石炉



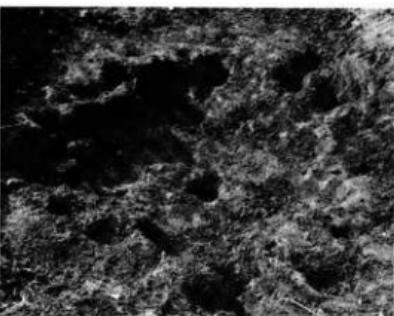
第3号住居址石圆炉



第4号住居址



第4号住居地石圓炉



ピット1号



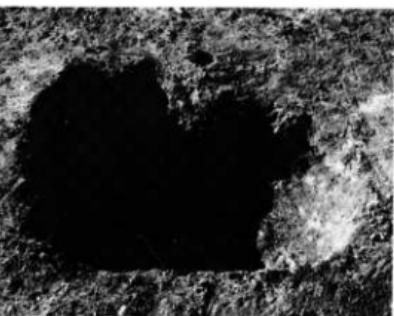
ピット2号



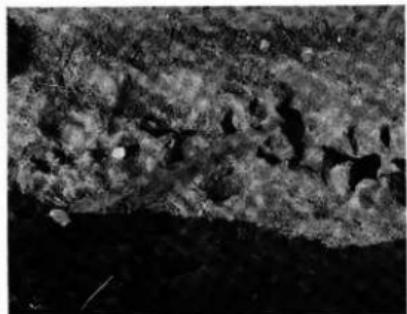
ピット3号



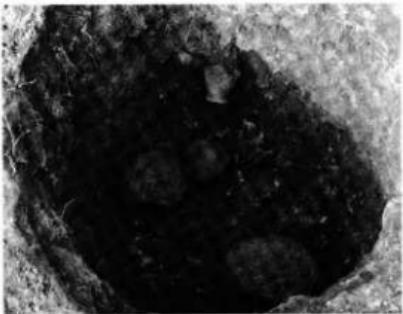
ピット4号



ピット5号



ピット 6 号



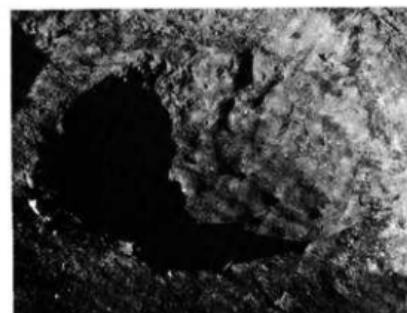
ピット 7 号



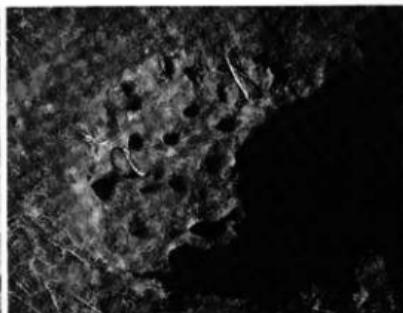
ピット 9 号集石遺構



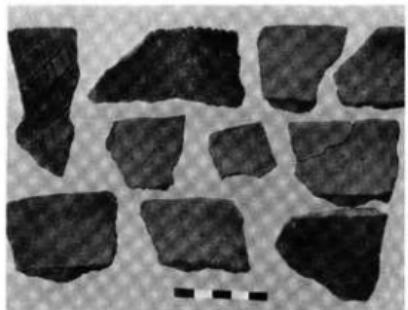
ピット 9 号発掘状況



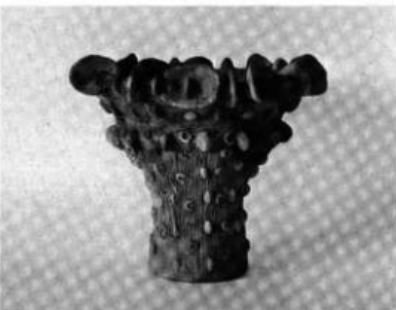
集石を撤去したピット 9 号



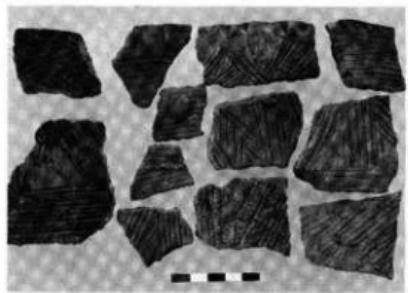
ピット 10号



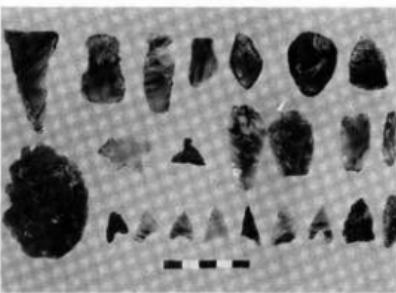
第2号住居址出土土器



第1号住居址出土土器



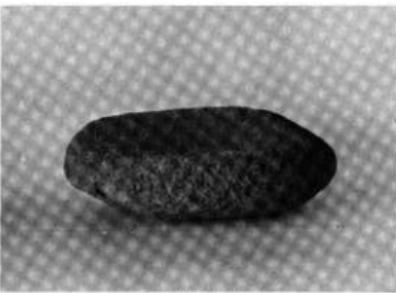
下島式土器



石 器



石斧 凹石



第1号住居址出土石皿



発掘状況



教育委員の視察



発掘最終日

丸山遺跡

昭和49年3月25日 印刷

昭和49年3月30日 発行

長野県茅野市ちの4104番地
発行所 茅野市教育委員会

長野県岡谷市川岸108番地
印刷所 中央印刷株式会社
(非売品)

